— 発 行 —

伝統芸能アーカイブ＆リサーチオフィス
〒604-8156 京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町 546-2 京都芸術センター内

TEL 075-255-9600
FAX 075-213-1004
e-mail taro@kac.or.jp
URL http://www.traditional-arts.org

— 発 行 日 —

令和 2 年 3 月 31 日

伝統芸能文化創生プロジェクト
2019 年度 事業報告書

伝統芸能アーカイブ＆リサーチオフィス（TARO）

Traditional Arts Archive & Research Office

伝統芸能文化を未来へ

Traditional Arts
Archive
&
Research
Office

伝統芸能アーカイブ＆リサーチオフィス（TARO）

目 次

1. 伝統芸能文化創生プロジェクトについて ―― p.1

2. 伝統芸能文化とは ―― p.2

3. 実施事業

実施事業一覧 ―― p.3

a. ネットワーク構築 ―― p.4

― ネットワーク先リスト

― 伝統芸能文化創生ネットワーク会議：「無形文化遺産の防災」関西連絡会議

b. 伝統芸能文化の現代に適応した形での活性化 ―― p.5~9

― 伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム

c. 伝統芸能文化の創生のためのシンポジウム＆公演 ―― p.12~13

― 鬼と芸能 ―― 古今東西の鬼大集合

d. 地域の小中学校との連携プログラム ―― p.14~15

― 御所南小学校 6 年生による「令和につなごう！伝統文化継承プロジェクト」

―【企画制作】中学生の能楽大連吟～未来～

e. 相談窓口 ―― p.16~17

f. 受託・協力事業 ―― p.18~20

―【受託事業】文化庁「伝統芸能用具・原材料に関する調査事業」

教文伝統芸能シリーズ「能楽なう」

―【協力事業】シンポジウム「京都創生推進フォーラム」

京都市自治 120 周年記念式典　オープニングセレモニー

京都府立文化芸術会館開館 50 周年記念式典

左京区誕生 90 周年記念式典

g. ウェブサイト ―― p.21~23

1 伝統芸能文化創生プロジェクトについて

■「伝統芸能文化創生プロジェクト」と「伝統芸能文化センター」構想

「伝統芸能文化センター」は、2011年に京都市が策定した「国立京都伝統芸能文化センター（仮称）基本構想」（素案）に示されている“伝統芸能文化の継承・創造の拠点施設”です。センターが備えるべき機能として以下の６つが掲げられています。

1　伝統芸能に関する学術研究
2　伝統芸能に関する創造・普及
3　楽器・用具用品に関する相談・支援
4　ネットワーク・コーディネート
5　全国発信・地域間交流
6　海外発信・国際交流

この６つの機能の実現のため、先行的に実施した 2007～2013 年度の「京都創生座」や 2009～2016 年度の「五感で感じる和の文化事業」では、流派を越えて伝統芸能の持つ力を引き出す創作・公演や、国内外への発信・交流、一般市民への普及等に取り組んできました。その成果を引き継ぎ、2017 年度からは「伝統芸能文化創生プロジェクト」として、上記の６つの機能を更に強化するための活動を行っています。この「伝統芸能文化創生プロジェクト」を推進する主体となるのが、京都市と京都芸術センターから成る伝統芸能アーカイブ＆リサーチオフィス（TARO）です。

■ 伝統芸能アーカイブ ＆ リサーチオフィス

（Traditional Arts Archive&Research Office　略称:TARO）

TARO は、「伝統芸能文化センター」に必要とされる機能の確保・強化に取り組む事務局として 2017年度に京都芸術センター内に設置されました。伝統芸能の継承や保存、用具・用品とその材料の確保、普及・創造・発信活動など、伝統芸能文化の総合的な活性化の観点から、ネットワークの構築や基礎調査等を進めています。

■「伝統芸能文化センター」構想の経緯

2003 年度	京都創生懇談会より「国家戦略としての京都創生の提言」提出
2004 年度	「歴史都市・京都創生策」策定
2006 年度	京都創生研究会「国立京都伝統芸能文化センター（仮称）」分科会を設置。2008 年度まで検討（全 9 回開催）
	「歴史都市・京都創生策 II」策定→国へ要望
	「京都文化芸術都市創生計画」策定→「国立京都伝統芸能文化センター（仮称）の整備」が重点課題に
2007 年度	「京都創生座」事業の実施（～2013 年度）
2009 年度	「五感で感じる和の文化事業」の実施（～2016 年度）
2011 年度	「国立京都伝統芸能文化センター（仮称）基本構想（素案）」策定→国へ要望（以降，毎年度要望）
	「京都文化芸術都市創生計画　改訂版」策定→重要施策群 1 ：継承と創造に関する人材の育成等に位置付け
2013 年度	「創生劇場」の実施（～現在）
2014 年度	「京都文化芸術プログラム 2020」策定→プログラムを牽引する重要事業に位置付け
2016 年度	「第 2 期 京都文化芸術都市創生計画」策定→8 つの最重要施策のうちの 1 つに位置付け
2017 年度	「伝統芸能文化創生プロジェクト」の実施
	「伝統芸能アーカイブ＆リサーチオフィス」を京都芸術センター内に設置

② 伝統芸能文化とは

TARO が対象とする伝統芸能文化は、**古典芸能**（落語、漫談、義太夫、奇術などの演芸も含む）や**民俗芸能**（広義の儀礼・祭礼・年中行事等を含む）、これらに不可欠な材料・道具の製作に係る**伝統工芸技術**に至るまで、極めて多岐にわたります。

伝統芸能文化創生プロジェクトでは、以上のように「伝統芸能」に係る多くの分野を総合した概念として「伝統芸能文化」という名称を用いています。

歴史を通じて形成されてきた精神性、美的感性、文化的価値が総合的に凝縮されている伝統芸能文化は、言語や文学の伝統と同様に失ってはならないかけがえのないものです。

	古典芸能	民俗芸能
伝承者と鑑賞者	専門の実演家によって、目の肥えた観客を相手に演じられてきた。	芸能専業ではない伝承者によって、信仰行事の一環として、神仏に奉納するために演じられてきた。
内 容	日本で近世以前に創始され、現在も実演されている芸能。能・狂言・歌舞伎・文楽・日本舞踊・邦楽・落語・講談など。	五穀豊穣・長寿・悪疫退散などを神に祈って行われる民間の信仰行事に伴い、各地域社会で伝承されてきた芸能。郷土芸能。

上記に係る伝統工芸技術や楽器・用具用品、材料等

古典芸能、民俗芸能に用いられる楽器・用具用品、またそれらを作るために必要な材料や伝統工芸技術。

③ 実施事業

■ 実施事業一覧

a ネットワーク構築

- ネットワーク先リスト
- 伝統芸能文化創生ネットワーク会議：「無形文化遺産の防災」関西連絡会議

b 伝統芸能文化の現代に適応した形での活性化

- 伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム

c 伝統芸能文化の創生のためのシンポジウム＆公演

- 鬼と芸能 —— 古今東西の鬼大集合

d 地域の小中学校との連携プログラム

- 御所南小学校 6 年生による「令和につなごう！伝統文化継承プロジェクト」
- 【企画制作】中学生の能楽大連吟～未来～

e 相談窓口

f 受託・協力事業

- 受託事業
  - 「伝統芸能用具・原材料に関する調査事業」
  - 教文伝統芸能シリーズ「能楽なう」
- 協力事業
  - シンポジウム「京都創生推進フォーラム」
  - 京都市自治 120 周年記念式典　オープニングセレモニー
  - 京都府立文化芸術会館開館 50 周年記念式典
  - 左京区誕生 90 周年記念式典

g ウェブサイト

a ネットワーク構築

― ネットワーク先リスト

TARO は、伝統芸能文化の保存・継承・普及・アーカイブ等に取り組む
下記の機関・施設等とネットワークを作り、情報共有と連携を図っています。

- アサノ楽器
- 一般財団法人伝統的工芸品産業振興協会
- 今井三絃店
- 鹿児島市文化振興課
- かごしま文化情報センター
- 株式会社篠笛文化研究社
- 株式会社鳥羽屋
- 株式会社宮本卯之助商店
- 上鳥羽橋上鉦講中
- 木之本町邦楽器原糸製造保存会
- 岐阜県産業技術センター紙業部
- 九州の神楽ネットワーク協議会
- 京都市産業観光局商工部伝統産業課
- 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課
- 京都市歴史資料館
- 京都市立御所南小学校
- 京都伝統産業ミュージアム（公益財団法人京都伝統産業交流センター）
- 公益財団法人鼓童文化財団
- 公益財団法人札幌市芸術文化財団
- 公益財団法人日本伝統文化振興財団
- 公益財団法人ポーラ伝統文化振興財団
- 公益財団法人未来工学研究所
- 公立大学法人京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター
- 大学共同利用機関人間文化研究機構
- 国際日本文化研究センター（日文研）
- 国立能楽堂 (独立行政法人日本芸術文化振興会)
- 古典芸能よせぴっ
- ゴッタン成音会
- 茂山千五郎家
- 曽於市立財部北小学校
- 田中製紙工業株式会社
- 田中村六斎念仏保存会
- 地方独立行政法人京都市産業技術研究所
- 伝統芸能の道具ラボ
- 東京鹿踊
- 独立行政法人国立文化財機構アジア太平洋無形文化遺産研究センター
- 独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所無形文化遺産部
- 十津川村総務課企画グループ
- 奈良県地域振興部文化財保存課
- 能楽大連吟実行委員会
- ひっつんつん保存会
- 福居一大会甑島ごったん部
- 福知山伝統文化を守る会
  ――NPO 法人丹波漆、福知山藍同好会 (由良川藍)、
- 丹後二俣紙保存会 (丹後和紙)
- フリースタイルな僧侶たち
- 文化庁地域文化創生本部
- 文化庁文化財第一課
- 邦楽ジャーナル
- 三股町企画商工課
- 宮崎県オールみやざき営業課

ほか（５０音順）

― 伝統芸能文化創生ネットワーク会議：「無形文化遺産の防災」関西連絡会議

日時 | 2020 年 2 月 8 日（土）10:00-12:00
会場 | 京都芸術センター ミーティングルーム 2

東京文化財研究所 無形文化遺産部が行っている、関西の各府県の文化財担当者を対象にした「無形文化遺産の防災」関西連絡会議との共催で、伝統芸能文化創生ネットワーク会議を開催しました。

この会議は、国立文化財機構が平成 26 年 7 月より文化庁の補助金事業として取り組んでいる「文化財防災ネットワーク推進事業」の一環で、無形文化遺産の防災について検討・推進するため、防災の基礎情報となる文化財の所在情報の収集・共有や、関係者間のネットワーク構築を目指して行われています。

昨年度に続き京都での開催となった今回は、近畿圏の文化財担当者 8 名、文化庁、東京文化財研究所から 8 名、京都市から 3 名、計 19 名が参加しました。参加者それぞれの地域に残る無形文化財に関する実情や、保存・防災に関する取組について情報交換を行い、課題を共有するとともに、相互にネットワークを構築しました。

b 伝統芸能文化の現代に適応した形での活性化

― 伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム

伝統芸能文化（古典芸能、民俗芸能、又はそれらに係る楽器・用具用品、材料や伝統工芸技術等）において支援を必要とするプログラムを公募し，内容を審査したうえで，伝統芸能アーカイブ＆リサーチオフィスとの共同プログラムとして実施しました。

「伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム」は助成金ではありません。提出された申請書を基に計画から運営まで申請者と TARO が共同で行うという全国でも他に類を見ないものです。申請者（団体）と TARO のいずれか一方だけでは実現できないような取り組みを共同で実施することで、伝統芸能文化に新しい波を起こすことを目指しました。

今年度は 11 件の応募があり、審査を経て 3 件を採択し、現在進行中です。昨年度採択した 3 件のうち 2 件は、今年度に事業を完了しました。

1．目的・特徴

伝統芸能に用いられる楽器・用具用品の復元や、伝統芸能文化を現代に適合した形で活性化させようとする取組を、伝統芸能アーカイブ＆リサーチオフィスと共同で実施しました。

2．募集する事業

ア　伝統芸能文化の保存、継承、普及、活用のために必要な取組
イ　継承に関して緊急性・必要性が高く、関係機関の協力が必要な取組

3．対象者

研究者及びコーディネーター、実演家、職人、地域の文化を保存する方々など

4．伝統芸能アーカイブ＆リサーチオフィスが負担する金額上限

1 件当たり 100 万円／年

5．募集期間

2019 年 2 月 26 日（火）～ 5 月 21 日（火）

3. 実施事業
b. 伝統芸能文化の現代に適応した形での活性化

― 平成 30 年度 伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム採択事業

上鳥羽の芸能六斎の復活を目指して－祇園囃子の創作

申請者：上鳥羽橋上鉦講中（代表：熊田茂男）

「祇園囃子」は京都の民俗芸能「六斎念仏」でも演じられています。上鳥羽で大正期以来中断していた「祇園囃子」を復元（創作）し、芸能六斎を復活することで、民俗芸能継承の新たな潮流を発信しました。2019年度に事業を完了し、報告書を作成しました。

シンポジウム＆実演
「六斎念仏 ― 復活と継承のためにできることー」

日時：2019 年 7 月 7 日（日）13:30-16:00　会場：京都芸術センター 講堂

出演：第一部　シンポジウム
葛野公明（ひっつんつん保存会）
原田一樹（上鳥羽橋上鉦講中芸能六斎指導）
西村武生（田中村六斎念仏保存会）

第二部　実演
ひっつんつん保存会「六斎念仏」
田中村六斎念仏保存会「鉦回向」
上鳥羽橋上鉦講中「祇園囃子」

浄禅寺奉納

「祇園囃子」を含めた全演目を披露（一山打ち）しました。

日時：2019 年 8 月 22 日（木）19:00-21:00

場所：鳥羽地蔵尊浄禅寺

「京都の民俗芸能　上鳥羽六斎念仏」

上鳥羽の六斎念仏を紹介する冊子を
2019 年 3 月に発行しました。

※TARO のウェブサイトで公開しています

3. 実施事業
b. 伝統芸能文化の現代に適応した形での活性化

柳川三味線のための胴皮新素材開発

申請者：林美恵子（柳川三味線）

柳川三味線の胴皮に用いられる猫皮が入手困難であるため、皮の代替品となりうる和紙を開発しています。胴への張り方を工夫したり、実演家による試演のフィードバック等を重ねて、演奏会に耐えうる精度にまで高めるべく、2019年度3月現在も改良を続けています。

「第46回 林美恵子と門下による地歌箏曲演奏会」

（2019 年 9 月 8 日、京都府立府民ホール アルティ）にて、
改良中の和紙による胴皮を張った三味線での演奏を披露しました。

ゴッタンの製造技法および基礎資料のアーカイブと交流ネットワークの創出

申請者：ゴッタンプロジェクト（代表：橋口晃一、黒坂周吾）

南九州（鹿児島県、宮崎県）の三弦楽器「ゴッタン」の職人が減少してきているため、楽器の製作技術の記録を行いました。また、ゴッタンを取り巻く現在の状況や、歴史的背景の調査を行うとともに、ゴッタンネットワークを構築することで認知向上を目指しました。2019 年度に事業を完了し、報告書を作成しました。

「ゴッタンライブ＆交流会」

日時：2019 年 4 月 6 日（土）ライブ 14:00-17:00 ／懇親会 17:00-19:00
会場：トマルビル地下ギャラリー（鹿児島市泉町 1-8）
出演：橋口晃一、永山成子、サカキマンゴー、寺原仁太（飛込参加）トークゲスト：木下賢也
共催：トマルビルアートディレクター木下賢也

「ゴッタンを語れ！」

ゴッタンに関わる演奏者、職人、研究者などを紹介する
冊子を 2019 年 3 月に発行しました。

※TARO のウェブサイトで公開しています

「ゴッタンの作り方」

ゴッタンの製作技術の記録を、美木工房（宮崎県三股町）
の上牧正輝さんの協力のもとで製作し、2020 年 2 月に
発行しました。

令和元年度　伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム採択事業

■ 十津川盆踊りの伝承・保存・活用発信

申請者：十津川盆踊り実行委員会
（実行委員長 佐古金一、事務局 土井麻利江）

国・村の文化財指定有無に関わらず、各大字で異なる特色を持つ十津川盆踊りの現状調査、演目の復元、ネットワークの構築に取り組み、それに応じた伝承・保存方法を提案します。伝統芸能を地域振興にも活かす方法を模索し、プロジェクトの過程と成果を情報発信します。

■ 新内節の発信と保存プロジェクト

申請者：新内節の発信と保存プロジェクト（代表 新内志賀）

現在、新内節には、東京を拠点に 10 以上の流派が存在しています。まず、稀曲を含めた楽曲の採譜とデジタルアーカイブ化をすることで伝承と保存を図ります。また、新内節の復興に向けて流派間のネットワークを構築します。これらによって、京都の浄瑠璃から派生した新内節の活性化を目指します。

連続講座「新内節を語る」

第１回「我が師を語る」
日時：2020 年 1 月 25 日（土）15:00-16:30
会場：京都芸術センター　和室「明倫」　講師：鶴賀伊勢吉

第２回「創作を語る」
日時：2020 年 2 月 11 日（火・祝）15:00-17:00
会場：京都芸術センター　大広間
講師：岡本宮之助　ゲスト：細川周平

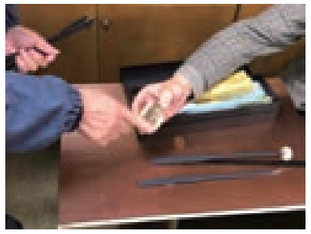
第３回「女流を語る」
会場：京都芸術センター　和室「明倫」　講師：富士松菊子
（新型コロナウイルス感染症拡大防止のため来年度に実施予定。）

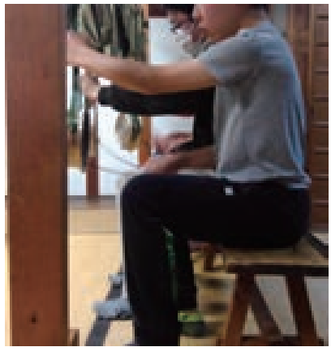
●三回とも聞き手：新内志賀、細野桜子

■ 素材による鉦すりの試作と生産業者の探索

申請者：祇園祭囃子方連絡会（代表 木村幾次郎）

祇園祭のお囃子に用いる鉦すりの柄は鯨の髭から作られてきました。近年では鯨の髭が入手困難であるため樹脂製のものも多いです。今回は、既存の樹脂製製品よりも、しなりの良い新素材による柄の開発を目指します。





3. 実施事業
b. 伝統芸能文化の現代に適応した形での活性化

■ 申請者説明会

京都
日時：2019 年 4 月 13 日（土）14:00 ～ 16:00
会場：京都芸術センター 講堂

東京
日時：2019 年 4 月 27 日（土）14:00 ～ 16:00
会場：独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所

「伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム」募集期間内に、東京と京都の２会場で、本プログラムの趣旨についての説明会を開催しました。応募を検討している方を対象とした個別相談や、申請書の書き方等についてのアドバイスも行いました。

▲東京会場

▲京都会場

■ 中間報告会（2019年度採択分）・報告会（2018 年度採択分）

日時：2020 年 2 月 9 日（日）13:30-16:20
会場：京都芸術センター 講堂

「伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム」採択事業の報告会（平成 30 年度採択分）と中間報告会（令和元年度採択分）を開催しました。一般にも公開しながら、各分野の専門家や有識者から意見や提案をうかがいました。

c 伝統芸能文化の創生のためのシンポジウム＆公演

シンポジウム＆公演

― 鬼と芸能：古今東西の鬼大集合

日時 | 2020 年 2 月 8 日（土）13:00-17:00
会場 | 京都芸術センター 講堂

第 1 部 シンポジウム（13:00-15:30）

基調講演　小松和彦（国際日本文化研究センター所長）
シンポジスト　横山太郎（立教大学教授）
川崎瑞穂（神戸大学・日本学術振興会特別研究員）
三宅流（映画監督）

第 2 部 公演（15:45-17:00）

狂言「節分」（鬼：茂山千五郎、女：島田洋海）
母ケ浦の面浮立（佐賀県・母ケ浦面浮立保存会）
北藤根鬼剣舞（岩手県・北藤根鬼剣舞保存会）

来場者数：178 名

――

日本の鬼は、恐れの対象になることもあれば、幸福をもたらす存在になることもあります。「鬼と芸能――古今東西の鬼大集合」では、古典芸能、民俗芸能における両義的な鬼の姿を、シンポジウムと講演で浮き彫りにすることを試みました。

第 1 部シンポジウムでは、文化人類学や民俗学、能楽研究の専門家３名と、能や民俗芸能のドキュメンタリー映画を撮り続けてきた映画監督 1 名が、それぞれの切り口から発表を行った後、ディスカッションを行いました。

まず、最初に基調講演として、鬼、妖怪、呪術、憑依などをテーマとした多くの著作で知られている小松和彦さんに「鬼とは何か」についてお話しいただきました。小松さんによれば、鬼とは「人間」の反対の形象として相対的に捉える必要があり、恐怖や災厄のみならず「自分たち」に危害を及ぼす過剰な力を持つもの全てに「鬼」というラベルが貼られる可能性があるのだと言います。人間世界の外側から災いを持ち込んでくる鬼は、追い払われるべき存在なので、退治されることによってありがたい存在でもあるという両義的な性格を持っています。元々は目に見えない、この世ならざる存在である鬼を、人々は語ったり（口承、書承）、描いたり（絵画、造形）、演じたり（芸能）することで形を与えてきました。つまり、日本の文化を多様な側面から照らし出してくれる鏡のような存在が鬼なのだと言います。

続いて、能楽を中心とした演劇学、身体文化研究、芸術思想などの分野で活躍している横山太郎さんが、能の鬼についてお話ししました。申楽において鬼を造形した面をつけた役が追い払われる演技が能の起源であるというのが有力な一説であるように、能の成立において鬼は重要な位置付けにあります。よく知られている鬼の型、鬼のイメージは世阿弥以降に形作られたもので、初期の能では鬼をどのようにして表すのかが決まってはおらず、多様な表現がなされていたのだと言います。横山さんは発表の中で、世阿弥の残した書物から、彼が定式化した鬼がどのようなものであったのか、そしてまた彼が抑圧しようとした鬼はどのようなものだったのかを読み取っていきました。

３人目の発表者は、民族音楽学の方法を用いて、全国の鬼の芸能や神楽の研究を行なっている気鋭の研究者の川崎瑞穂さんです。川崎さんは、鬼の芸能の音に注目して、鬼を表現するための音、あるいは囃子というのは存在するのかどうかという問いをめぐる刺激的な発表を行いました。川崎さんによれば、天狗の場合は共通点が見出されるのに対して、鬼については全国の芸能を見渡してみても非常に多様で、鬼を表す特定の音や囃子は存在しないのだそうです。加えて、川崎さんは、アニメなどのサブカルチャーの中に登場する鬼の音についても分析を広げていきました。アニメでは教会旋法の一つであるフリギア旋法が鬼を表現するメロディーに用いられることが多いように思われますが、やはりそれには当てはまらない例はいくらでもあります。このように「鬼の音」なるものを定義できないことを、鬼の実体を欠いた存在としての特性と結びつけて論じました。

最後は、映画監督の三宅流さんにお話しいただきました。三宅さんはドキュメンタリーを中心に映画を制作しており、2008 年には、北藤根鬼剣舞と深い関わりを持つ岩手県北上市の岩崎鬼剣舞の活動を追った映画「究竟の地――岩崎鬼剣舞の一年」を制作しました。今回は、その撮影の際に見たことや感じたことについて報告していただきました。三宅さんが現地で何より強く感じたのは、鬼剣舞は今を生きている芸能であるということ、子供たちにも格好いいものとして認められるようなリアリティを持っていることでした。また、彼らは鬼を演じることで神に近づいていこうとしているようにも感じられたのだと言います。鬼剣舞における鬼とは、異界から襲来してくる異質な存在というよりも、人と神のあわいにあるものなのではないかという締めくくりで報告は終わりました。

ディスカッションでは、小松さんからの問いかけに答える形で議論がおこなわれました。信仰と結びついた神に捧げる行為と観客を想定した見せ物との間で揺れ動く芸能の捉え方、芸能が滅びていく中でも伝統的な形を保存しようとする傾向とその一方で残していくために新しい試みを積極的に取り入れようとする傾向の２つ極の間に位置付けられる伝承性の問題、プロとアマチュアの違いあるいは重なり合いの問題、今なお鬼の芸能が残っている理由や魅力など、多岐にわたる話題について活発な議論が行われました。

第２部では、茂山千五郎家による狂言「節分」、佐賀県の「母ケ浦の面浮立」、岩手県の「北藤根鬼剣舞」の４つの芸能が実演されました。

狂言「節分」は文字通り、節分の豆まきを主題とした演目です。劇中で、鬼が女を口説く場面で歌われる歌は、室町時代の歌謡が取

り入れられたものです。怖いはずの鬼が、人間と同様に、好きな女性の前では弱い存在となってしまうことを戯画的に描き出すのがこの演目です。

「母ケ浦の面浮立」は、佐賀県・鹿島市の鎮守神社の秋祭りで五穀豊穣を願って奉納されている芸能です。鹿島市には二つの面浮立の系統があり、鬼面芸として完成された芸と構成を持っている「母ヶ浦の面浮立」と、もっとも古い形を残している「音成の面浮立」があります。どちらも力強く振りかざす手の動き（「力み手」）や、大地を踏みしめる足の動き（「力足」）を主体とする悪霊鎮圧的な性格を持っていますが、「母ヶ浦の面浮立」は、とりわけ踏み歩みが特徴的な勇壮な面浮立です。本来は 40 名以上の人数で行われているものですが、今回は 11 人という少人数の構成で５曲の演技を披露しました。

最後に披露した「北藤根鬼剣舞」は、勇ましい鬼の面と勇壮な舞で知られている芸能です。鬼剣舞は、岩手県北上市周辺に伝わる芸能の一つで、その発祥は 1300年前に遡ると言われています。特徴的な面には白、赤、青、黒の４色と黄色のカッカタ面とがあり、それぞれ四季や方位を表しています。中でも白い面は、最も巧い舞い手がつけられる面です。鬼剣舞における鬼は仏の化身なので、角がないのも特徴です。今回は、８人踊りの「刀剣舞」と、白い面の演者が一人で舞う「一人加護」の二つの演目を披露しました。

京都に居ながらにして、京都を拠点とする狂言師の舞台だけでなく、東北と九州の鬼の芸能を観ることができる貴重な機会となりました。

d 地域の小中学校との連携プログラム

TARO は、こどもや青少年に向けた伝統芸能文化の普及・教育にも力を入れています。
今年度は、京都市立御所南小学校と連携して、児童が授業で学んだことの成果を発表する場を設けました。

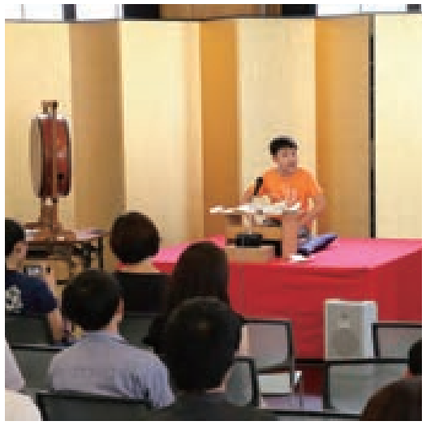
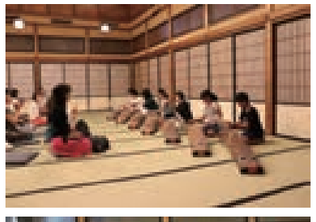
御所南小学校６年生による「令和につなごう！伝統文化継承プロジェクト」

日時	2019 年 8 月 30 日（金）13:30〜15:00
会場	京都芸術センター 各会場
主催	京都市立御所南小学校６年生、 伝統芸能アーカイブ＆リサーチオフィス（京都市，京都芸術センター）、 京都工芸繊維大学
協力	文化庁地域文化創生本部

京都市立御所南小学校６年生は、総合的な学習の時間「雅のまこと」で、弟子入り体験や授業を通じて、日本舞踊、箏、書道、能、落語、雅楽、狂言、いけばな、水墨画、茶道を学びました。TARO は、児童がそこで学んだことを発表する「令和につなごう！伝統文化継承プロジェクト」を、御所南小学校と共同主催で企画しました。

実施にあたって、児童の自主性を重視して、TARO はアドバイスをする立場から関わりました。広報から準備、発表内容の決定まで、できるだけ児童自身に行なってもらいました。まず、自分たちが感じた伝統芸能、伝統文化の魅力を伝えるために、グループに分かれてディスカッションを行い、体験コーナーや展示、実演といった形態で発表することを決定しました。また、事前にポスターを作って地域に配布し、マスコットキャラクターをデザインして宣伝を行うだけでなく、当日のフェスティバルの運営も児童自らが行いました。

併せて、京都工芸繊維大学の夏季集中科目「京の文化行政」のカリキュラムの一つとしても位置付け、大学生にも、児童の視点から見た伝統芸能・伝統文化を体験してもらい、小学生、大学生、地域住民の交流の輪が広がりました。

【企画制作】中学生の能楽大連吟〜未来〜

稽古

2019 年 9 月〜 11 月に各中学校で 5 回程度実施

講師	観世流能楽師 深野貴彦、松野浩行、 宮本茂樹、松井美樹、樹下千慧
参加校	烏丸中学校、京都御池中学校、嵯峨中学校、 東山泉小中学校、凌風小中学校

成果発表会

日時	2019 年 11 月 23 日（土・祝）13:00 〜 14:00
会場	京都市右京ふれあい文化会館
内容	挨拶　京都市副市長、文化庁地域文化創生本部 上席調査役 能・解説　松野浩行、深野貴彦、松井美樹、宮本茂樹 半能「高砂」 シテ　樹下千慧 ワキ　小林　努 笛　森田保美　小鼓：曽和鼓堂　大鼓：渡部 愉　太鼓：前川光範 地謡　烏丸中学校、京都御池中学校、嵯峨中学校、東山泉小中学校、凌風小中学校の 1 〜3 年生 144 名、 深野貴彦、松野浩行、宮本茂樹、松井美樹 後見　河村浩太郎、齊藤信輔、今村哲朗

料金：無料　来場者数：246 人
主催：京都市　企画制作：伝統芸能アーカイブ＆リサーチオフィス　協力：能楽大連吟実行委員会

京都市は、伝統文化の未来の担い手、支え手の育成に繋がることを期待して、能楽の「謡」に青少年が親しむことができる「中学生の能楽大連吟〜未来〜」を開催しました。一般の人々が大勢で能「高砂」を謡う「能楽大連吟」は、2008 年から市内各地で行われてきました。それを中学生にも体験してもらうために、伝統芸能アーカイブ＆リサーチオフィスは「能楽大連吟」を開催している能楽師とのコーディネート役を担いました。

2019 年 9 月〜 11 月の間に、能楽師の深野、松野、宮本、松井、樹下がそれぞれ 5 回、各中学校に訪問して稽古を行いました。また、11 月 11 日には京都芸術センターで全体稽古も行いました。本番では、総勢 144 名もの中学生が、シテ方、ワキ方、囃子方も加わった「高砂」に「謡」の合唱の形で参加し、能楽の舞台を完成させました。他の中学校からも「中学生の能楽大連吟〜未来〜」に参加したいという声があり、次年度も継続していく予定です。

e 相談窓口

TARO では、伝統芸能文化に係る相談窓口を設置しています。芸能の演者、彼らを支える人、芸能に関心のある人など、どなたからでも相談を受け付けています。また、それをきっかけに様々な支援活動を展開しています。

質問・相談者

アーティスト	11
実演家（古典芸能）	22
実演家（民俗芸能）	23
職人	10
研究者	22
一般	16
学校	6
企業	12
団体・公共施設	27
市町村（地方自治体）	26
メディア・プレス	15

（件）

連絡方法

電話	60
メール	50
対面	81

（件）

地 域

京都府内	111
京都府外	70
その他	10

（件）

質問・質問内容

TARO の活動について	17
企画・運営に関する相談	42
取材依頼	18
復元・活性化共同プログラムに関する質問	61
民俗芸能	12
古典芸能	26
伝統工芸	12
その他伝統工芸	3

（件）

（2019年4月1日から2020年2月17日現在） **件数190件**

質問・相談例

伝統芸能を活用して新たなビジネスを始めたい。（一般）

映像で古典芸能の舞台を撮影しようと考えている。実演家にどのように依頼し、どういうやり取りをするとよいか、アドバイスがほしい。（企業）

民俗芸能において、既存とは異なるネットワークの創出を試みたい。（民俗芸能実演家）

日本の古典芸能を披露するフェスティバルに実演家を招へいしたい。アドバイスがほしい。（企業）

海外で伝統芸能の公演を依頼されたが、どのようなプログラムがいいか、企画書の書き方など相談に乗ってほしい。（古典芸能実演家）

とある舞台道具をつくる職人が減少してきたので、職人の養成から始めるようなプログラムを考えている。アドバイスがほしい。（舞台道具会社）

映画と古典芸能を繋ぐようなイベントを考えているので、実演家を紹介してほしい。（企業）

古典芸能の観客をつくっていきたい、どう取り組んでいくか。（公共施設職員）

そちらが企画制作されたチラシがとても良かったので、デザイナーと繋いでほしい。（公共施設職員）

修学旅行で京都に来るので、京都の民俗芸能を体験してみたい。（中学校教諭）

家にゴッタンがあるので、どういう活用方法があるか、どうしたらいいか、とにかく電話をしてみました。（一般）

東京で伝統芸能の裾野を広げていく活動をしたいと考えている。どういうやり方があるか。（公共施設職員）

民俗芸能のとあるネットワークを作ったが、具体的にどのように動かしていっていいかわからない、相談に乗ってほしい。（民俗芸能団体）

映像で民俗芸能の動きやフォーメーションを撮影し、それをその地域の継承に生かす取り組みがしたいと考えている。共に何か取り組めないか。（企業）

ネットワークがない職人が仕事として成立させるためには課題が多いため、相談に乗ってほしい。（職人）

古典芸能の創作を、とあるプレゼンテーションで提案したい。よきアイデアはないか。（企業）

大規模な能公演を開催しようと考えているが、メールやウェブのみでチケット受付することは実際に可能か、能楽公演なども行っている貴オフィスに相談したい。（企業）

f 受託・協力事業

受託事業

○ 文化庁「伝統芸能用具・原材料に関する調査事業」

文化庁による「伝統芸能用具・原材料に関する調査事業」を、伝統芸能アーカイブ＆リサーチオフィスが実施しました。

期間	2020 年 2 月 25 日～ 2020 年 3 月 31 日
事業内容	1）調査委員会の運営
	2）実演家、関係者へのヒアリング　＊4 件（重要無形文化財各個認定保持者、（一社）全国邦楽器組合連合会、他）
	3）調査方法の提案及びアンケート調査様式の作成
	4）報告書の作成

＊「伝統芸能用具・原材料に関する調査事業」について

重要無形文化財に指定された芸能を中心とする伝統芸能諸分野においては、邦楽器をはじめとして衣装、小道具等、実演に不可欠な用具が数多く存在します。伝統芸能の確実な継承のためには、これら用具の安定的な確保・供給が重要であり、また用具の製作には技術者の存在とともに原材料の確保も必須ですが、実演家等の伝統芸能関係者の間では従来の用具・原材料の入手困難が深刻化しています。

このため、伝統芸能の確実な継承を図り、入手困難等の問題点を抱える用具・原材料や技術者の現状を把握し、その安定確保等の方策を検討することを目的として、文化庁が本事業・調査を実施します。今年度は、次年度より本格的に文化庁が実施する調査の前段階としての位置づけで調査を実施しました。

○ 教文伝統芸能シリーズ「能楽なう」

日時	2019 年 9 月 4 日（水）18:30 開演
会場	札幌市教育文化会館 大ホール

ー能 金春流「葛城 大和舞」

シテ：中村昌弘
ワキ：原　陸　　ワキツレ：岡　充
アイ：茂山千五郎
後見：辻井八郎、井上貴寛
地謡：高橋忍、金春憲和、山井綱雄、本田芳樹、本田布由樹、政木哲司
笛　：藤田貴寛
小鼓：成田達志
大鼓：亀井広忠
太鼓：前川光範

ー狂言 大蔵流「左近三郎」

左近三郎：茂山千五郎
出家：茂山茂
後見：柴田鉄平

ー能 金剛流「雷電」

シテ：宇髙竜成
ワキ：岡　充　　ワキツレ：原　陸
アイ：茂山茂
後見：廣田幸稔、豊嶋幸洋
地謡：種田道一、豊嶋晃嗣、金剛龍謹、宇髙徳成、山田伊純、重本昌也
笛　：藤田貴寛
小鼓：成田達志
大鼓：亀井広忠
太鼓：前川光範

解説	山井綱雄、豊嶋晃嗣
主催	札幌市教育文化会館
共催	北海道新聞社
企画制作	伝統芸能アーカイブ＆リサーチオフィス
後援	札幌市、札幌市教育委員会

TARO は主催者である札幌市教育文化会館と連携して、本格的な能舞台を使い、次世代へ向けて能楽を普及する「教文古典芸能シリーズ」を毎年開催しています。「能楽なう」では、30 代、40 代の比較的若手の、今最も旬の能楽師の舞台を紹介しています。

能楽師を取り上げる今回は、金春流の中村昌弘と金剛流の宇髙竜成を招き、金春流「葛城 大和舞」、金剛流「雷電」を上演しました。中村、宇髙とも、自身が主催する公演で、従来とは異なるシステムや手法で能を発信している能楽師です。中村は、しっとりした曲である「葛城」を選び、一面の銀世界が浮かび上がるように演じ、終曲部の謡の節回しががらっと変わる小書「大和舞」にて、金春流らしい古来の型を位高く演じました。宇髙は動きが大きく物語がわかりやすい「雷電」を選び、金剛流の特徴の一つである舞や動きを大いにアピールしました。また、開場時に舞台にて、中村・宇髙の上世代にあたる山井、豊嶋が所作や演目の捉え方の違いなどのトークを行うことで、流儀の違いについての理解を深めてもらうよう努めました。

公演前日には、札幌市内の小・中学生を対象に「能楽鑑賞教室」を実施し、能の囃子や謡についてレクチャーを行い、教科書でも取りあげられている「羽衣」を舞囃子の形で披露しました。

協力事業

○ シンポジウム「京都創生推進フォーラム」

オープニングでの「落語」のコーディネートとして協力。

日時	2019 年 7 月 25 日（木）13:30-16:00
会場	ロームシアター京都 サウスホール
内容	落語「はてなの茶碗」
出演	桂二乗
主催	京都市創生推進フォーラム、京都市
後援	京都創生百人委員会
協力	伝統芸能アーカイブ＆リサーチオフィス

○ 京都市自治 120 周年記念式典 オープニングセレモニー

オープニングセレモニーの「落語」の企画制作として協力。

日時	2019 年 10 月 15 日（火）10:00-12:00
会場	ロームシアター京都 メインホール
内容	いけばなと邦楽の共演、落語
出演	西阪専慶、西山早和子、大西典子、西野幸子、桂米二
主催	京都市
協力	伝統芸能アーカイブ＆リサーチオフィス、（公財）京都市芸術文化協会

○ 京都府立文化芸術会館開館 50 周年記念式典

以前企画制作した「noh play」のスクリーンの提供とアーティストサポートとして協力。

日時	2020 年 1 月 8 日（水）13:45-
会場	京都府立文化芸術会館
内容	noh play（ヤマガミユキヒロ＋林宗一郎、田茂井廣道、樹下千慧ほか）、落語、日本舞踊、狂言
主催	京都府・指定管理者 創［（公財）京都文化財団・（株）コングレ共同事業体］
協力	伝統芸能アーカイブ＆リサーチオフィス

○ 左京区誕生 90 周年記念式典

式典の「いけばな」と「能楽」のコーディネート協力。

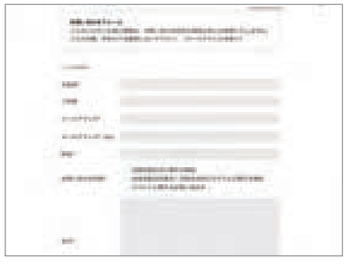
（新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、中止となりました。）

会場	グランドプリンスホテル京都 プリンスホール
内容	いけばなと能仕舞、小鼓
出演	笹岡隆甫、林宗一郎、曽和鼓堂ほか
主催	左京区誕生 90 周年記念事業実行委員会
協力	伝統芸能アーカイブ＆リサーチオフィス

g ウェブサイト

— http://www.traditional-arts.org/

TARO の最新ニュースやイベント情報を掲示しているだけではなく、伝統芸能文化に関する記事や、過去事業の記録を動画と文章で随時投稿しています。ウェブ相談窓口では、伝統芸能文化に関する相談、伝統芸能文化復元・活性化共同プログラムに関する相談、イベントに関するお問い合わせ等を受け付けています。いつでも気軽にアクセスできるウェブサイトが皆さんと繋がる第一歩となります。また、TAROの年度事業報告書や、「伝統芸能文化復元・活性化プログラム」の各種発行物、「伝統芸能文化センター」設立に向けた京都市と京都芸術センターの取り組みをまとめた冊子「伝統芸能文化センターの実現を目指して」もダウンロードできます。



― 今年度アップしたレポート、コラム記事

講座シリーズ＃4
「篠笛を知る～祭が育む日本の音～」レポート

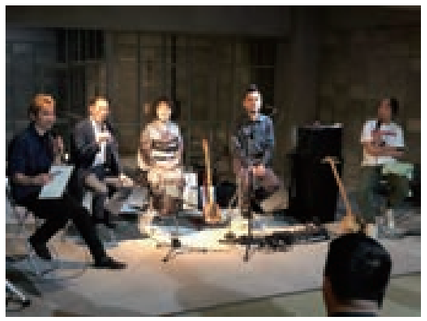
TARO は、専門家や活動団体、研究機関とのネットワークから毎回異なる講師をお招きし、独自の切り口で伝統芸能文化を紹介する講座シリーズを開催しています。2018 年 11 月 18 日（日）に、講師に森田玲氏（篠笛奏者）と森田香織氏（笛師）をお招きし、篠笛の歴史と文化についてお話しいただきました。その講演の内容をレポートとして公開しました。

三浦基「能と現代演劇」

演出家の三浦基氏が主宰し、京都を拠点に活動する劇団「地点」。日本の現代演劇を代表するこの劇団は、「観劇観能エクスチェンジプログラム」を企画するなど、近年、能楽に接近しています。そんな三浦氏に「能と現代演劇」というテーマで寄稿していただきました。

歌舞伎俳優 中村壱太郎さんインタビュー
（聞き手：広瀬依子）

今、「最も美しい女を演じている」という定評のある歌舞伎役者・中村壱太郎さん。日本舞踊の吾妻流七代目家元としても活躍しています。2019 年 2 月 11 日に京都芸術センターで行われた「継ぐこと・伝えること 62〈享楽 × 恍恍惚惚ー男舞・女舞ー〉」にご出演いただいた際に、歌舞伎への思いやご自身のことをお聞きしました。



「ゴッタンはかっこいい！」

平成 30 年度「伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム」採択事業の「ゴッタンの製造技法および基礎資料のアーカイブと交流ネットワークの創出」の一環として、鹿児島市で「ゴッタンライブ＆交流会」を開催しました。当日お越しいただいたアートディレクター花田理絵子氏にレポートを寄稿していただきました。

3. 実施事業
g. ウェブサイト

講座シリーズ＃5
「三味線組歌ってなに？
～楽譜から読み解く三味線古歌謡～」レポート

2018 年 12 月 23 日（日）に開催した講座シリーズでは、講師に井口はる菜氏（関西外国語大学外国語学部講師）をお招きし、柳川流三味線組歌の復原についてのお話と演奏をしていただきました。古楽譜の解釈の仕方についての講演内容だけではなく、当日の演奏も一部、動画で見ることができます。

柳沼昭徳「混淆（こんこう）を知る」

2015 年の『新・内山』という東日本大震災を背景とした作品以降、劇作家・演出家の柳沼昭徳氏が手がける演劇には、神楽の要素が度々現れてきます。そんな柳沼氏に、演劇人として神楽をどのように見ているのかについて、ご寄稿いただきました。

「鹿踊のある風景から」
（第４回「先覚に聴く」レポート）

TARO は、先んじてあることの重要性に気づき、礎を築いた先覚者からお話をうかがうトークイベント「先覚に聴く」を開催しています。2019 年 3 月 21 日（木・祝）に行った第４回「先覚に聴く」では、東北地方の文化や歴史、風土などを総合的に研究する「東北学」の提唱者として知られる民俗学者・赤坂憲雄さんに、鹿踊をはじめとした東北の民俗芸能についてお話いただきました。聞き手には、東京鹿踊の代表であり、全日本郷土芸能協会の事務局次長・理事でもある小岩秀太郎さんをお招きしました。当日のお話の要約をウェブで公開しました。

「かくれ里」としての久多

室町時代に流行した風流踊の伝統を残すと伝えられる奉納踊である「久多花笠踊」（国指定重要無形民俗文化財）について、現地レポートを旦部辰徳（文筆家）にご執筆いただきました。